

アジアから見た日本文学--半井桃水が近代の初期に政治小説を書いていたことの意義

著者	全 円子
雑誌名	清心語文
号	10
ページ	24-31
発行年	2008-07
URL	http://id.nii.ac.jp/1560/00000239/

アジアから見た日本文学

——半井桃水が近代の初期に政治小説を書いていたことの意義——

全 円子

第一節 福澤諭吉の「脱亜論」

日本の近代史は戦争と切り離しては考えられない。一八九四年・一八九五年の日清戦争、一九〇四年・一九〇五年の日露戦争、続いて一九一四年から一九一八年にかけての第一次世界大戦、そして一九三一年からはじまる十五年戦争としての日中戦争・太平洋戦争などの対外戦争を起こしてきた。このように、日本の近代文学を考える時に、国民の精神と物質の両面にわたって多大な影響を及ぼした戦争の問題は避けることができないのである。しかし、戦争と近代文学との関わりは、それ自体を直接主題としてあまり掘り下げられることはなく、近代文学史の総体からみればまだまだであると思われる。文学との関係においては、あくまで戦争を対象として見据えつつ作品の内部に立ち入り、時代背景を踏まえて考察する必要があると思う。

明治時代には福沢諭吉が「脱亜論」を唱え、日清戦争を経て日露戦争後に夏目漱石は『満韓とところどころ』を執筆しているが、民族の間

題には無頓着な様子が窺える。また、大正・昭和時代に執筆された志賀直哉の『暗夜行路』では不逞鮮人の閔徳元を登場させるが、志賀は植民地支配のことについての自らの考えには触れていないのである。

福沢諭吉をはじめとして多くの人々が、西欧に関心をもち「脱亜論」を唱えていた時代に、桃水や一葉は東洋に目を向けていたのである。「文明社会」西欧に追いつこうとするばかりの大きなうねりの中で、桃水の見識は極東アジアの朝鮮・中国・日本が如何にすれば西欧の植民地と化せず、独立して存続できるのかというものであった。このことは、明治文学が西欧と日本の関係だけでなく、アジアから日本文学を眺める視点も伴っていたことを表していると思われる。

福澤諭吉は、アジアの極東で幕藩体制の長い鎖国状態にあった、遅れていたと考えられる日本の社会を、文明開化へ導こうとした。一八八五年に執筆した「脱亜論」では、日本の隣国である「支那」「朝鮮」がすみやかに旧套を脱して近代化への道を歩むことを要望し、もし叶わないならば、今後は行いを共にしないというものであった。これに先立ち一八七九年には慶応義塾に清国人を教師として迎え支那語科

を開設したり、一八八一年には朝鮮人の留学生二名を自宅に寄宿させたりした。そして、一八八二年の壬午事変後に謝罪使として来日した朴泳孝と顧問の金玉均に会ったのである。この二人は半井桃水の『胡砂吹く風』にも登場している。金玉均らは、福沢諭吉を頼り独立運動についての助援を求め、諭吉も応じる気構えを見せたのである。しかし、一八八四年に金玉均らが起こしたクーデター甲申事変は失敗に終り、その後も「朝鮮」にからむ問題は複雑化し、十年後に日清戦争を迎える。その勝利に福沢諭吉が歓喜したことは明らかで、『時事新報』にかかげた論述に「日清の戦争は文野の戦争なり」というのがあり。つまり、福沢諭吉にとって日清戦争は文明（日本）と野蛮（支那）との戦いであって、文明が勝利した戦いと捉えられた。そして、朝鮮が日本の外交問題の最大のテーマになった時に、同じく『時事新報』に朝鮮政略論というもので、論陣を張っていく。朝鮮半島の人々を教化するためには、鉄道や通信など目に見えるもので、文明の力を実感させるべきであるということを力説するのである。日清戦争では鉄道の利用は不可能だったので、膨大な荷車や人力車によって物資が運ばれた。その後、山県有朋が朝鮮半島に鉄道を敷設すべしという提言により、見事に実現していく。この鉄道の力は、日本の植民地主義と切り離せないものとして大きな力をもっていく。そして、一九〇九年（明治四十二年）十月二十六日にハルビン駅で安重根^{（注①）}によって伊藤博文が射殺され、翌年には日韓併合に至った。福沢諭吉は既に亡くなっているが、晩年において日本の未来に対して楽天的な気分になったと

言われている。まるで、日本と朝鮮半島の併合を予期したかのよう

第二節 夏目漱石の『満韓とところどころ』

半井桃水が東京朝日新聞に『胡砂吹く風』を連載した後に、夏目漱石が新聞小説を手掛けるようになる。半井桃水は『石の罫』（一九一二年～一九一三年）を九十一回連載した。その二十一回目の東京朝日新聞に夏目漱石の『行人』の連載が開始されたのである。当時の読者は右側（六面）で漱石の『行人』を読み、左側（七面）で桃水の『石の罫』を読んだことになる。半井桃水は夏目漱石と同時代人で、同じ新聞社の同僚作家であった。しかし、現在の文学史観では、樋口一葉や夏目漱石は純文学作家であるが、半井桃水は大衆文学作家で取るに足りないという評価が一般であろうと思われる。しかし、今後は半井桃水の視点を見直す必要があると考えられる。半井桃水を再評価する為には、初期の作品である『胡砂吹く風』を夏目漱石の『満韓とところどころ』などと比較することで、両者の民族的問題についての意識の差を明確にすることが重要である。

夏目漱石は南満鐵道会社の友人のついで、朝鮮半島と中国を旅行して様々なエッセイを執筆している。満韓視察ということで、行き先はハルビンまでである。『満韓の文明』（一九〇九年十月十八日）や『満韓とところどころ』（一九〇九年十月二十一日～十二月三十日）がある。執筆当時は同年十月に伊藤博文がハルビン駅で射殺されたことを機に、

翌年には日本が朝鮮半島を植民地にするという時代であるが、漱石の文章からは両国の緊迫した空気を嗅ぎ取ることはできない。次に、『滿韓の文明』を引用する。

此の度旅行して感心したのは、日本人は進取の氣象に富んで居て、貧乏世帯ながら分相應に何処迄も發展して行くと云ふ事実と之に伴ふ経営者の氣慨であります。滿韓を遊歴して見ると成程日本人は頼母しい國民だと云ふ氣が起こります。従つて何処へ行つても肩身が広くつて心持が宜いです。之に反して支那人や朝鮮人を見ると甚だ氣の毒になります。幸ひにして日本人に生まれてゐて仕合わせだと思ひました。

とある。日露戦争の結果、日本は朝鮮を保護国とし、ロシアから遼東半島南部と南滿州鐵道などの利権を譲り受けたほか、サハリン南半分を獲得することになった。これが執筆された翌年に日本は朝鮮を植民地支配した。しかし、夏目漱石は「支那人や朝鮮人を見ると甚だ氣の毒」「幸ひにして日本人に生れてゐて仕合せだ」という発想しかなく、民族的問題に対して非常に鈍感なのである。『滿韓とどこどこ』においては、日露戦争後の遼東半島の様子を思うままに書き、年末から年始に書き続けては切りが悪いということで終えている。これに対して、同じように日本と中国と朝鮮を舞台とした半井桃水の『胡砂吹く風』は、民族的問題意識の扱い方において、また政治小説としても、夏目漱石の作品より視野の広さを感じるのである。

第三節 志賀直哉の『暗夜行路』

日清戦争前後は戦争に対して好戦の傾向がみられたのに対して、日露戦争後は反戦の風潮も見受けられた。特に関東大震災以後には、プロレタリア文学運動なども行われた。その第一人者であった小林多喜二は、志賀直哉に傾倒していた。志賀直哉が「小説の神様」としてゆるぎない地位を確立した作品の『暗夜行路』をもとに、戦争がどのように関わっていたのかを検討したいと思う。この作品は一九二一年から「改造」に断続的に連載され、一九三七年に完結している。つまり、完成までに十六年を要しているのである。この頃、朝鮮半島は日本の植民地であったが、志賀直哉の朝鮮統治についての意見は述べられているのであろうか。第四章の謙作がお栄を心配して朝鮮へ迎えに行く場面を引用する。

謙作は朝鮮では余り歩かなかった。開城から平壤へ一泊で出かけた以外は、或る晴れた日、お栄と清涼里の尼寺に精進料理を食に行つた位のものでした。途中山の清水の湧いている所で朝鮮人の家族がピクニックをしているのを見かけた。白髯の老人が何か話している、囲りの人々が静かにそれに聴入っている、長い物語でもしているらしかった。昔ながらの風俗らしく、見る者に何か親しい感じを与えた。南山から北漢山を望んだ景色が好きで、彼は二度其所へ出かけて行つた。景福宮、昌德宮、それから夜は一

人で鐘路の夜店あさりをした。古い螺鈿の鏡台があり、欲しかったが、毀れている割りに値が高かった。彼は美しい華革張りの文函を直子の為めに求めた。これも今出来でなく、いい味があった。平壤への汽車の中で、彼は高麗焼の窯跡を廻っているその方の研究家と一緒に、色々そういう話を聞いた。謙作とは殆ど同年輩の人だったが、話しぶりにも老成した所があり、朝鮮統治などにも一トかどの意見を持っていた。

この中の「高麗焼の窯跡を廻っているその方の研究家」を登場させたことは、「白樺」の同人である柳宗悦^(註2)と関わりがあると思われる。彼は植民地支配下で、朝鮮人の声を聞き、景福宮の光化門を守る運動をした人物として知られているが、一方では朝鮮の陶芸をこよなく愛し、浅川巧^(註3)らとその陶芸品を保存するための民族博物館を建てた人でもある。柳宗悦と親交のあった志賀直哉が、彼から朝鮮の様子を聞いて書かれた場面に違いないことを裏付ける記述が、阿川弘之氏の『志賀直哉下』(岩波書店)である。引用すると『柳宗悦の研究家』に問合わせるのは、直哉が朝鮮旅行の経験をもつてゐないからである。小説の筋立て上、行つたことのない朝鮮へ主人公を行かせて、その土地の風景風俗を描写するといふ無理を冒さなくてはならなくなり、作者は宗悦の朝鮮における豊富な見聞を頼りにした」とある。

この問題を考えるにあたっては、『暗夜行路』の中で、朝鮮の風景描写の後に、平壤へ行く途中に車中で聞かされる閔徳元の話が重要である。阿川弘之氏は、これも柳宗悦夫妻から聞いたのであらうとしてい

る。引用すると、

謙作は此人から或る不逞鮮人の話を聞いた。閔徳元という若い両斑で、その地方では相当勢力のある金持ちであつたが、鉄道敷設の計画で、その方の役人から相談を受け、一手に敷設の買占を引きうけた。

絶対秘密で、安く買上げるつもりだったが自分の土地は総て抵当とし、親類縁者からも金が出る所は総て出さし、益々買占めの手を拡げて行く内に何時か此噂も評判となつた。

人々は閔徳元を裏切者として憎んだ。然し彼は自分は単に親日主義者なのだといつていた。

とある。この後、鉄道敷地の買い上げが始まったが、閔が買い占めた土地とは離れていた事を、役人が打ち明けれずにいたのである。その結果、

役人の言葉を簡単に信じた所に自分の手落ちはあるにしても、こちらから勧めて来た話である以上、此行違ひに對し、誰か責任を持ち、どうかして呉れる者があつてもいい筈だ。見す見す自分一人が見殺しにされる。閔は此事をいつて再三再四、総督府に談判した。然し誰も取りあつてくれる者はいなかつた。責任者をだしてくれといつても、勧めた役人は今は内地に還つて、いないといふ風で、その真偽は別として、彼に對し氣の毒だつたというだけの誠意さえも見せなかつた。閔が此不合理に就いて熱すれば熱する程、役人の方は冷めたく取扱つた。そしてそれ以上に熱するよ

うなら不逞鮮人と認めるような気配さえ見せた。結局閔は泣寝入りより仕方がなかった。

その後、一二年して、閔徳元は札つきの不逞鮮人になった。彼は何かの意味で日本に復讐してやろうと決心した。朝鮮の独立という程の事は彼には考えられなかった。それは殆ど不可能な事に思えていたし、その夢想は彼にはなかったが、それより彼では自分から総ての物を奪って了った者に対する復讐だ。絶望的な復讐心だった。彼は近年あらゆる悪い事に関係していた。

とあり、最終的に彼は死刑になる。閔徳元のモデルは確定できないが、この場面では閔の悪行よりも、当時の植民地支配下にある朝鮮人や親日主義者、そして朝鮮総督府のやり方が見事に描写されていると思われる。閔徳元を登場させたことで、志賀直哉自身の民族的問題提起や意見は、おそらく柳宗悦に近いものがあつたに違いないと思われるが、作品の表面には具体的に本人のものとして現れていないのである。

一九二九年に京都にいた柳宗悦が、京城にいた浅川巧に宛てた書簡を引用すると、「…外には霰がちらつている京都の夜だよ。君のいる京城郊外の気温も零下に下がっているだろうか。今頃温突房で朝鮮のお盆に仲良く座り囲んで朝鮮の食器で食事をしているだろう。どんな運命だろう。君と僕は一生朝鮮とは離れようとしても離れられない因縁で絡んで生きているようだな。我らはできる限り、思いきつて朝鮮のための仕事をすることにしよう。」（一九九九年五月十日朝鮮日報）とある。柳宗悦や浅川巧のように朝鮮統治に独自の意見を持ち、民族

的問題提起をしたうえ実践した人物が存在したにもかかわらず、近代文学史上の作品においては何故具体的に表現されなかったのか^⑧。私は、もう一つの日本文学史のあり得たかもしれない可能性を半井桃水の『胡砂吹く風』が持っていたと思うのである。西洋に目を向け、支那人や朝鮮人を自分たちの子分のように思う風潮があつた近代の初期に、半井桃水が日清韓が同盟を組む政治小説を書いていたことは重要で、その埋もれた可能性、つまりアジアのなから冷静に日本を見つめる姿勢に再度光りを当てる必要があると思う。

第四節 戦争と日本近代文学

日本は戦後六十年という言葉を頻繁に使うが、戦前六十年に引き戻せば一九四五年を境に戦前五十年は日清戦争の年である。私は二十世紀の日本を考える時に、戦後六十年ではアジアと日本の関係を語ることは出来ないと思うのである。近代日本文学史に埋もれている、日清戦争前に政治的な思い入れを吐露した半井桃水の『胡砂吹く風』を再評価することは、日帝時代に埋もれてしまった韓国・朝鮮文学や台湾文学と、戦後の在日文学の在り方を、再検討することにつながるのではなからうか。

日本の植民地時代に、日本語で作品を書いた作家李光洙^⑨がいたが、彼は親日文学者として名前を残している。朝鮮文学者李光洙は一九〇五年に十五歳で日本に留学し、一九一〇年に帰国している。日本

留学中に日本語による短編『愛か』を執筆している。「朝鮮近代文学の父」とよばれ彼の文名を高めた作品は、長編小説の『無情』^⑥である。これは、『毎日申報』の編集局長をしていた徳富蘇峰の紹介で、一九一六年一月～一九一七年六月まで連載された。一九二〇年代に、朝鮮社会で女性解放思想を主張した女性作家に金一葉がいる。彼女の本名は金元周だが、李光洙が樋口一葉から名をとるように勧めて改名したのである。彼は日本との併合のニュースを鉄道の駅の貼り紙で知り、長時間号泣したという。その後、一九一九年早稲田大学に留学中に独立運動に加担して、留学生代表で「朝鮮青年独立団宣言書」を起草し上海に亡命する。しかし、一九二二年急に帰国した彼は東亜日報社に入り、文筆活動を行うようになり、一九三三年に朝鮮日報社に移っても執筆は続いた。そして、一九三七年の修養同友会事件で仲間と逮捕される。一九四一年無罪となるが、心の支えともなっていた友人が犠牲となった。これ以後李光洙は親目的な立場に身を置くようになっていき、創氏改名（香山光郎）を最初にするようになる。香山光郎の名前を使った日本語の小説は四作品^⑦である。一九四三年に「新太陽」に載せた『兵になれる』では、李光洙の長男の死を題材にして、徴兵制度が朝鮮人にも適用されたことに迎合した作品である。長男が通っていた幼稚園は内地人ばかりで、自分だけが兵隊にならないことを悔やんで死んでいった息子を思い出し、今やっと「兵になれる」と叫ぶ場面には李光洙の複雑な心情がうかがえる。また、日本人以上に日本人になろうと過剰適応する様子が痛ましい。一九四四年に「新太陽」

に載せた『少女の告白』では内地に住む一九歳の朝鮮人少女が主人公で、彼女が李光洙の講演に感激し手紙で心のうちを伝えるという設定である。その講演内容は主に日本の国体や大東亜戦争の目的や正義性、さらに帝国における朝鮮民衆の地位と進むべき道を説いたものであった。また、在日同胞の不甲斐なさを嘆き、内地人との差別に苦しむ彼女の心情も見事に描かれている。作品を通して、朝鮮の若者に日本国民として学徒出陣するよう呼びかけたかもしれないが、視点をかえて読むと在日のつらい立場や、植民地下において苦しむ朝鮮民衆の叫びも行間から読み取れる。李光洙は時代の流れに吞まれ、親日派の代表というレッテルをはられ、親日文学者として朝鮮総督府に利用されたが、日本語で書かれた作品には迎合の中にも、彼本来の抵抗の精神が流れていると思われる。時代に翻弄されず生きたなら、彼は偉大な文学者になっていたかもしれない。李光洙は、日朝鮮近代文学史の中に埋もれた一人と言えるだろう。

戦後の在日文学の在り方が、現在問われるようになってきた。例えば台湾や韓国・朝鮮人の在日の作家の例を見ても分かるように、文壇での活躍が目覚ましくなってきたからだ。芥川賞を受賞した作家と作品には、李恢成の『砧をうつ女』、李良枝の『田廬』、柳美里の『家族シネマ』、玄月の『蔭の棲みか』がある。また、直木賞は邱永漢の『香港』、陳舜臣の『青五獅子香炉』、つかこうへいの『蒲田行進曲』、伊集院静の『受け月』などがある。日本の文壇で活躍する多くの在日作家たちは、果たして在日文学者として自立しているのかどうか。私は彼

く、死後遺徳を忍んだ人もいた。

2 柳宗悦

らが日本の文壇に所属しても良いと思うが、日本文学が手なずけているような、つまり日本文学に同化していくようなところからは出て、自立していかなければならないと思う。そうしなければ、日帝時代に朝鮮総督府に利用された李光洙のような作家を生み出すことになると思うからだ。また、今後のアジアのなかの日本文学を考える時に、日本にとっても重要なキーワードになるだろうと思われる。

半井桃水は欠落した日本近代文学の視点をもっていた。それは、日本からアジアを眺めるのではなく、お互いの民族を大切にしてアジアのなかの日本を考えるというものである。もし、当時桃水が異端児的な存在でなく、明治の時代に一つの視点として認められていたならば、近代文学史も影響を受けていたと考えられる。半井桃水を再評価することは、今後在日文学者が独自の民族意識を自由に表現すること、つまり在日文学者として自立していくことにもつながるので重要である。

注1 安重根

一九〇九年に韓国統監を辞任して樞密院議長になった伊藤博文を射殺した安重根は、翌年に旅順監獄で死刑に処せられた。安は一八七九年に黄海道海州で生まれ、父泰熙はソウル滞在中に開化派の朴泳孝に選ばれ留学が予定されていたが、甲申事変でクルーデターが失敗し、安一族は国の独立を願い山里に移住した。これをはじめ、射殺の理由を閔妃殺害事件など十五項目あげた。獄中で「東洋平和論」を執筆するなどした彼に共感した日本人も少なくない。

3 浅川巧

一八九一年山梨県に生まれる。二十三歳で朝鮮にわたり、総督府の山林課と林業試験所で林業に携わる一方で、朝鮮陶芸品をこよなく愛し、それらを保存するための民族博物館を柳宗悦らと建てた。植民地下にあった朝鮮の生活では、朝鮮語を話し、食事や服も朝鮮式で、日本人でありながら朝鮮独自の文化を残す運動をした。そして、四十歳の若さで亡くなり朝鮮の土となった。朝鮮民芸の書である『朝鮮の膳』と『朝鮮陶磁器名考』がある。

4 浅川巧の墓

浅川巧の墓はソウル郊外の忘憂里共同墓地二〇三三六三にある。一九三一年に四十歳で亡くなった浅川の遺言によって、韓国式で里門里の韓国人墓地に葬られた。植民地解放直後に、日本人の墓がごとく破壊されたが、浅川の墓は林業試験場の人々によって、手厚く忘憂里に再建された。石碑には「韓国の土と民芸を愛

し韓国人の心の中に生きた日本人。ここ韓国本土となる」とある。韓国の土となった日本人浅川巧は現在においても、韓国の人々に慕われ続けている。

5 李光洙

一八九二年平安道定州に生まれる。幼くして孤児となり、天道教の援助を受け日本の明治学院に留学する。そして、一九一九年早稲田大学在学中に二・八独立宣言書を起草して上海に亡命するが、一九三七年以後は親日文学者として活動する。解放後には、『わが告白』の中で民族を守るためにしたと弁明したが、朝鮮戦争中に北朝鮮に拉致され、一九五〇年に病死したと伝えられる。

6 『無情』

一九一七年に李光洙が二十六歳で発表した朝鮮初の本格的長編小説。モダン日本社から一九三〇年に翻訳出版された。主人公の李亨植は作者と同様に孤児で、彼が孤独と寂しさの中で愛情を求め、自分の過去を取り戻して希望に満ちた将来へと進むというものである。このテーマは、当時植民地下で国家の主権を失っている朝鮮半島を象徴しており、作者自身の課題が民族のものと重なり画期的な作品となった。

7 四作品

・香山光郎〈李光洙〉「兵になれる」(『新太陽』・『モダン日本』改題)(新太陽社 一九四三年十一月)
・香山光郎〈李光洙〉「大東亜」(『緑旗』一九四三年二月)
・香山光郎「元述の出征」(『新時代』一九四四年六月)
・香山光郎「少女の告白」(『新太陽』一九四四年十月)
大村益夫・布袋敏博「近代朝鮮文学日本語作品集創作篇5」(緑陰書房 二〇〇一年二月)に拠る。

(ぜん かずこ／岡山商科大学 専任講師)